

# タイにおける学術誌評価

## ——学術誌の国際標準化に向けた挑戦——

小林 磨理恵

### ●はじめに

学術誌の影響度を測る一つの指標として、Journal Citation Reports (JCR) のインパクトファクターが定着をみて久しいが、インパクトファクター付与の対象にアジア・アフリカ諸国で出版される学術誌が多く含まれないことがしばしば指摘される。こうした限界に応える可能性を持つのは、アジア諸国側の独自の動きである。東南アジアでは、現在、ASEAN引用索引 (ASEAN Citation Index、以下ACI) としてASEAN 10カ国の引用索引を統合する取り組みが展開されている (参考文献①)。

東南アジア諸国のなかでいち早く学術誌の引用索引を作成し、他国の動きを牽引したのはタイであった。タイでは2001年以降、タイ学術誌引用索引 (Thai-Journal Citation Index、以下TCI) をもとに「インパクトファクター」が算出されてきた (参考文献②)。TCIの成果が、東南アジア諸国の取り組みの基盤をなしているといつてよい。本稿では、タイで学術誌評価が確立された経緯とTCIデータベースの概要、また、2016年に開催されたTCIのシンポジウムでの論点を報告する。

### ●TCIと学術誌評価

TCIの端緒は、2001年に実施された研究プロジェクト「タイ学術誌のためのサイテーションインパクトファクターインデックスの評価」に遡る (参考文献③)。本研究は、JCRのインパクトファクターと同じ計算式を用いて、タイで出版された68の学術誌を対象に、その「インパクトファクター」を算出したものである。タイ国内で学術誌の文献引用影響率が算出された例はこれが最初であり、それだけでも特筆に値するが、しかし本研究の真価は別のところにある。それは、タイ学術誌の輪郭を捉え、その課題を次のとおり提示

した点である。すなわち、①タイ国内で発表された論文の引用索引データベースが存在しない、②大部分の論文が全く引用されていない。引用されたとしても自己引用である、③大学等の機関が所属構成員の研究成果を広報することが、学術誌の主たる目的となっている、④大半の学術誌は厳格な査読プロセスを設けていない、⑤投稿数が少なく、体系的かつ効果的な査読プロセスが存在しないため、多くの学術誌が論文を適時に発表できない、⑥一つの学術誌に論文の執筆様式が複数存在する、などである。

タイ学術誌の抱える課題を的確に認識したことが、学術誌の質の改善を目的として学術誌評価を制度化する方向性を決定づけ、TCIセンターの創設へと導いた。TCIセンターは、タイ研究基金 (TRF) とモンクット王トンプリー工科大学の助成を受けて2004年に誕生した (現在はタイ国家学術研究会議 (NRCT) が後援)。学術誌を評価、選定したうえで引用索引をデータベース化し、毎年インパクトファクターを算出して現在に至る。当初は自然科学分野の学術誌に限定していたが、2008年以降タマサート大学図書館の協力を得て、人文社会科学分野にも対象を拡大した。2017年1月現在、データベースには685誌 (人文社会科学系377誌、自然科学系308誌) の記事索引の収録がある。

TCIセンターがデータベースを構築することの目的は、インパクトファクターの算出だけではない。それ以上に、タイ学術誌および論文の可視性の向上や、タイ学術誌の国際標準化を重視する向きがある。タイ学術誌の課題解決に向けて、TCIデータベースが収録対象とする学術誌の評価・選定には次のとおり明確な基準が設けられている。

#### 【主な評価基準】

- ① 全掲載論文は査読を経ている。
- ② 定められた発行頻度で発行されている。

- ③ 創刊後3年以上を経た、または、6号以上の刊行がある。

#### 【他の評価基準】

- ① TCIデータベースで検索可能な引用文献を有する。
- ② 明確な投稿規程と執筆様式を有する。
- ③ 編集部は様々な機関に属する編集委員を有する。
- ④ 内外に属する多様な執筆者を有する。
- ⑤ 全論文は、投稿規程に沿った様式で統一されている。
- ⑥ 学術誌に関する情報、投稿規程などを掲載したウェブサイト有する。ウェブサイトは随時更新されている。
- ⑦ 投稿を受け付けるオンラインシステムを有する。

発行が定期的であることや論文の様式が統一されていることは、Web of Science (WoS) 等の評価基準においても重視されている。一方で、編集委員や執筆者に多様な属性を求める点は、タイ学術誌の特性を踏まえたものといえる。つまり、それまでタイ学術誌は、大部分が大学／学部の内部の研究成果の発表媒体として位置づけられていたところを、外部の研究者およびその研究成果を多分に交えた構成にすることを要求している。また、タイ学術誌の大部分は紀要であるが、あらゆる学術誌に査読の徹底を課し、加えて査読者の半数以上は外部機関に属する者である必要がある。こうした評価基準の設定は、タイ学術誌の特性を大きく変える可能性を持つといえよう。

TCIセンターは上述の評価基準をもとに、各学術誌の「質」を3段階にグループ分けしている。グループ1は、同センターが質を良好なものと認め、TCIおよびACIのデータベースに論文の索引が収録される学術誌。グループ2は、同センターが質を良好なものと認め、TCIデータベースに収録されるが、グループ1に昇格するためには改善が求められる学術誌。ACIデータベースには収録されない。グループ3は、同センターが質を認めず、TCIデータベースへの収録も認められない学術誌である。ただし、ここで問われるのは、学術誌に掲載された個別の論文の質ではなく、あくまで学術誌の形態および運営管理面での質であることに注意を要する。

興味深いことには、各学術誌の編集者は高いインパクトファクターを得ることよりも、TCIデータベースに収録されることや、グループ1に認定されることを重視する。各学術誌のウェブサイトでは、インパクト

ファクターではなく、TCIデータベースに索引が収録され、グループ1に認定されたことを明示する機会が多い。

これは、タイの学術誌評価における一つの特徴といえる。つまり、タイ学術誌の編集者は、インパクトファクターを上げようとするのではなく、まずは学術誌としての「形」を国際標準に則って整え、それをより良質なものとして認可されることを通じて学術誌の地位を築こうとしているのである。TCIセンターの評価プロセスによって、論文の執筆様式が定型化され、引用数が増え、査読を求める論文の投稿が増え、優れた論文を選定する余地が生まれたことなどが編集者から指摘されている（参考文献④）。また、研究機関が研究者に対して「グループ1の学術誌」を投稿先として指定する事例もみられ、TCIセンターの学術誌評価の定着を示唆する。

#### ●TCIデータベースと「インパクトファクター」

ここでは、TCIデータベースでの雑誌記事・引用索引およびインパクトファクターの調べ方を紹介したい。まず、TCIセンターウェブサイトのトップページの検索画面で、雑誌名、論文名、著者名等をプルダウンで選び、検索語を入力して検索実行すると、該当する論文情報が一覧で表示される。ここに各論文の被引用数も表示され、その数をクリックすると、該当論文がどの文献に引用されているかが分かる。各論文のリンクをクリックすると、抄録、キーワードを含む論文の書誌情報が表示される。TCIデータベースは雑誌記事を検索するツールとしても有用である。

一方、同データベースの最大の課題は、各論文の被引用回数とその論文を引用した文献の情報は得られるが、その論文が引用した文献の情報は得られないことであり、改善が期待される。なお、ACIデータベースには引用文献が掲載され、この問題は存在しない。

次に、インパクトファクターの確認の仕方を紹介する。トップページのTJIFのタブから、自然科学分野または人文社会科学分野を選び、閲覧を希望する年をプルダウンで選択して結果を表示させると、各学術誌のインパクトファクターや掲載論文数、被引用数などの一覧を得られる。

各学術誌のリンクをクリックすると、その学術誌の被引用の詳細が明らかになる。たとえば2015年の人文

社会科学分野のインパクトファクターランクのトップであるUMT-Poly Journalの被引用には、直近2~3年の間に掲載した論文が多く引用されていることや、自誌引用が被引用総数の大半を占めることなどの特徴を捉えられる。

自然科学分野の学術誌の被引用数は、人文科学分野の学術誌に比べると多いものの、少数にとどまっている。TCIデータベースによって論文の可視性が高まったことは確かであるが、引用には十分に結びついていないといえるだろう。一方で、ここで引用・被引用の関係が網羅されるのは、TCIデータベースが対象とするタイで出版された学術誌に限られることに留意する必要がある。つまり、タイで出版された学術誌——特にWoS等に収録されている英語の学術誌——は、他国で出版された学術誌で引用されている可能性がある。したがって、TCIデータベース内で被引用数がゼロであることは、いずれの学術誌でも引用されていないことを意味するわけではない。同様に、TCIセンターのインパクトファクターが低くとも、JCRのインパクトファクターでは高い数値を示す可能性もあるのである。学術誌の引用影響率を算出する際に、一国内で出版された学術誌のみを対象とすることの限界性も理解しておく必要がある。

### ●学術誌の「国際化」をめぐる

TCIセンターは、各編集者にまずはTCIデータベースに収録されるに足る学術誌の水準を確立することを求めるが、その先はScopusやWoSなどの国際的なデータベースに収録されることを推奨している。こうしたタイ学術誌の「国際化」を目指す動きは、タイ国内の著名な研究者は、論文の投稿先に国際的なトップジャーナルを選択する傾向があり、国内で生産された研究成果が国内の学術誌で発表されないといった現状も起因している（参考文献④）。

編集者の意識を喚起するため、TCIセンターはエルゼビア社とタイ研究基金と共同で優れた学術誌に与える賞「TCI - Scopus - TRF Journal Awards」を設けている。同賞には国際版と国内版の2種があり、前者はTCIデータベースおよびScopusに収録された学術誌、後者はTCIデータベースに収録された学術誌を対象とする。TCIセンター主催の第11回シンポジウム（2016年12月）において、第3回目の表彰が行われ、国

際版にChiang Mai Journal of Science（チェンマイ大学理学部編）、国内版にSiriraj Medical Journal（マヒドン大学医学部シリラート病院校編）とThai Journal of Obstetrics and Gynaecology（タイ産婦人科学会編）が受賞した。これまでのところ、いずれも自然科学系の学術誌が受賞している。

2016年には、TCIセンターが主催するシンポジウムがバンコクにて5月と前述の12月に計2回開催された。全国からあらゆる分野の学術誌の編集者が集い、出席者総数は5月には450名、12月には600名以上にも上った。TCIの概要やタイ学術誌の質の現状、また、論文の投稿からデータベースへの収録までを管理する電子ジャーナルの管理・出版システム（Thai Journals Online）の使用方法などが報告された。12月のシンポジウムでは、第4回ACI運営委員会会議も併催された。ASEAN各国の代表者10名が顔をそろえ、各国の引用索引データベース構築に向けた取り組みの現状や、ACIデータベースの更新状況が報告されたほか、同年にカンボジア、フィリピン、マレーシア、ベトナムで開催された学術誌編集者のためのACIのワークショップの様子が紹介された。

一連の報告の後、TCIセンターを統括する研究者とフロアの編集者との間で闊達な質疑応答がなされた。12月のシンポジウムでは、編集者側から重要な問題が提起された。それは、使用言語の問題である。タイでは、特に人文社会科学分野の論文は大半がタイ語で執筆され、この傾向は今後も続くとみられる。TCIの評価・選定基準は、抄録についてはタイ語と英語の二言語で記載することを求めるが、タイトル等の書誌情報や引用文献には言語の条件を課さない。しかし一方で、ACIの評価基準は、タイトル、抄録等の書誌情報に加え、引用文献も「英語」で記載することを求める。ScopusおよびWoSの評価基準は、タイトル、抄録等の書誌情報には英語、引用文献には「ローマ字」を使用することを条件とする。タイの古い時代や文化に関する論文を中心に掲載する学術誌の編集者は、「たとえ論文本体が英語で執筆されていたとしても、引用文献の大半はタイ語で書かれた一次史料や研究書である。著者がこれらの書誌情報を全て『英語に翻訳』することは不可能」と主張した。これに対してTCIセンターの研究者は、「TCIデータベースへの収録のみを目指すならば、引用文献はタイ語のままでもよい。しかし

ACIやScopusなどの国際的なデータベースに収録されたいのであれば、方針を変える必要がある。それが『国際標準化』するということだ」と回答した。「英語」と「ローマ字」の区別が明確に共有されなかったことも一因となり、議論はやや錯綜した。先述のとおり、ScopusおよびWoSでは引用文献の「ローマ字化」が要件であり、英語への「翻訳」は求めている。一方、ACIの会議資料では引用文献も「英語」で記載することを評価基準として挙げ、口頭でもそうした説明があった。

タイ語の引用文献を「ローマ字化」ないし「英語化」して記載することには、著者の負担とは別の問題も存在すると考える。それは、元の言語から他の文字ないし言語に変換された書誌情報が、どの文献を指すのか判然としない事態が想定されることである。同じ文献を指している、ローマ字化の方法が異なれば違う文献を指すように見える。また、タイ語から英語に翻訳された書誌情報をもとに、該当のタイ語文献に正しく当たることは難しい。タイ語文献を用いる研究者にとっては、引用文献はタイ語綴りのまま記載される方がずっと分かりやすく、文献検索も容易である。したがって、「国際標準化」を目指すことが、学術情報流通をむしろ妨げる方向に働かないか、慎重に検討する必要がある。同時に、引用文献をタイ語綴りのまま記載することを許可するTCIのような国内の学術誌に特化したデータベースは、国際規模のデータベースに収斂されずに並存することが望ましい。ローマ字を言語に使用しないミャンマーやカンボジア等でも同様のことがいえるだろう。

## ●おわりに

TCIが誕生してから約15年が経過した。この間に学術誌のオープンアクセス化が加速するといった国際的な潮流も影響し、タイ学術誌は、単に発信する媒体ではなく、読まれる／引用されることを意識した媒体へと変化を遂げた。この変化を生んだのは、TCIセンターの存在である。個々で活動していた数百にも上る編集者を組織し、国際標準の学術誌を出版するという同じ方向へ向かわせた功績は大きい。とりわけインパクトファクターの数値を上げることも、学術誌の統一的な形態を確立し、個々の論文を含めその可視性を高めることを重視する取り組みは、高く評価されて良い

だろう。JCRのインパクトファクターには、個別の論文ないしは研究者個人の業績を評価する指標として「誤用」されるという批判が付きまとうが、TCIのインパクトファクターが、学術誌ではなく個別の論文を評価する指標として機能するような現象は今のところみられない。

TCIセンターが15年間にわたり、新たな課題に取り組んできたこともまた、特筆に値する。2010年に構想されたACIデータベースには、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピンの学術誌を中心に247誌の雑誌記事・引用索引が収録されている（2017年1月現在）。その他の国の文献情報も順次追加されていくこと、とりわけ自国内で学術情報流通の基盤が整わない、ラオス、カンボジア、ミャンマーといった国々での文献データベース構築を促し、その文献情報をも包摂するデータベースとして発展することを願う。

（こばやし まりえ／アジア経済研究所 在バンコク海外派遣員）

## 《参考文献》

- ① ASEAN Citation Index (ACI)  
<http://www.asean-cites.org/>
- ② Thai-Journal Citation Index (TCI) Centre  
[http://www.kmutt.ac.th/jif/public\\_html/](http://www.kmutt.ac.th/jif/public_html/)
- ③ N. Sombatsompop et al., "A Citation Report for Thai Academic Journals Published during 1996-2000," *Scientometrics*, Vol. 55, No. 3, 2002.
- ④ Narongrit Sombatsompop et al., "Thai-Journal Citation Index (TCI) Centre: 10 Years of Experiences, Lessons Learned, and Ongoing Development," *Malaysian Journal of Library & Information Science*, Vol. 17, No.3, 2012.